

日溜りや広場で、子どもが押しくらまんじゅうをするときにうたう。

青葉しげちゃん 昨日はいろいろお世話になりました
私こんどの日曜日 東京の女学校へまいります
女の子のゴムとびや縄とび遊びのときにうたう。「青葉茂れる桜井の」という湊川の替歌である。ほかに「大波小波」や「一番目は一宮」などの数えうたを歌いながらゴムとび遊びをする。

ほーたこいさんがへる あつちやの水はまあづいぞ
こつちの水はあーまいぞ ほーたこいさんがえる
蛭狩りのときにうたう歌。昭和十年頃からは、小学校唱歌「ほう、ほう、ほたるこい・・・」と歌って菜種がらをふりながら蛭を追いかけて捕えていた。

どんどの水は どうやってくむじや

つるべをかたげて こーやってくむじや

「どんど」は中山の東を流れる小川のふちになっている

拝借すると、「シヨンガイナー」は、節廻しの良い点は、盆おどりにふさわしい。情緒と土地の古くからの姿が見えるようである。」とあって、出演せられた人達も、この言葉を唯一の入賞土産としていたが、この自慢する人達すらあの世から岩滑の盆踊りを見に来るようになってしまった。

終戦後、段々世の中がおちつき盆踊りも年と共に盛んになってゆくが、盆踊りの晩は、村の八幡社の広場で踊る人達でぎっしりと埋まってしまうのである。盆踊りの晩だけは、若い娘さんや新婚さん、また、ひとり二人子どものある奥さん達まで、どんどん踊るようになって、盆踊りの晩は、ご主人や姑さんが子どもを抱えたり、手をひいたりしてお母さん達の盆踊りをみていることが多い。

踊り櫓を色とりどりの浴衣の女の子たちが、三重にも四重にも輪を作り、その外に婦人会の人達がさらに幾重にも輪を作つて踊りあかすのである。浴衣姿で伸び伸びと輪の中で楽しんでおられるお母さんの平和な姿は美しいものである。

昭和五十一年九月二十三日、半田市誌文化財編に岩滑盆踊り唄を掲載するために榊原勇治をたずねて聴取した古い岩滑盆踊り唄がある。これは大正のはじめ頃にうたわれていたもので浄土宗の家の庭先で踊った岩滑盆踊り

ところ。

岩滑盆踊り唄 昭和三十五年に、榊原仁造が俳句雑誌に岩滑の盆踊りを「郷土の踊りシヨンガイナー」として発表をしている。

佐渡といえは「佐渡おけさ」が話題になるように、遠来の人々との酒の席などで話のはずむ場合のいとぐちとなるのは、「半田亀崎女の夜這い云々」の古い半田の俚謡である。

丹後の宮津へゆけば、縞の財布が空になる・・・のより更にロマンチックな唄とあって、遠来の人達の興味をそえられるのは、人の常として、時にはこれを説明するのに閉口することもある。

俚謡に、踊りはつきもののように思われがちであるが、半田市内に残っている盆踊りも岩滑のシヨンガイナーと成岩にある盆踊り位であり、近在には盆踊りうたのあることをきかない。シヨンガイナーは古く大和から伝えられたとも言われているが、今はこの歌も踊りも若い人達には何の興味もないらしい。極めて単調な年寄り向きのこのシヨンガイナーは、若い者にはあることすら忘れられそうである。

中 略

昭和三十二年の夏、盆踊りのコンクールが開催されたが、岩滑はシヨンガイナーで参加をした。この時のNHKの審査員の言を

の唄である。

○（音頭） 盆が来たとしてナー 何うれしかろ

（踊る） 重ねかたびら 着るじやなし

シヨンガイナー アー盆だい 盆だい

○おらが殿さでほめるじやないが 色は黒うても気のよきよ

○娘島田が西の方へかたぐ 西にご縁があるそうだ

○くるかくるかど待つ夜は来んで 待たぬ夜さ来てかどに立つ

○夜だいて寝て別れがつろうて 吉野なわてで袖しぼる

○夜だいて寝て寝ほどがよけりや 妻と定めて寝ておくれ

○いとまごいして今朝出た舟が 今は権現の洲を廻る

○伊勢でおやまかつて古がが見れば 千里奥山古だぬき

○半田亀崎女の夜這い 男後生楽寝てまぢる

○今年しや日照りで後田がわれた 前の三十がりいつわれる

○はきすぎ下駄でも粗末にやならぬ 流しや蛙の遊山船

○何をくよくよ川端柳 水の流れを見てくらす

○これだけ踊るに出てみんやつは 足がどちんばかどめくらか

○どここの家でも憎い奴は婆だ 婆さかつぎ出せ六地藏へ

○やれそれ送りだんごよせくれにや仏さんの餅さげる

盆の十五日の夕方、青年たちが、現岩滑中町七丁目のシマヤの辻に集まり、シヨンガイナーを踊ったあと、浄

波丸田まで

○春は祭の数ある中で

仰ぐ岩滑の大轆り

○二人仲良く手すりにもたれ

見るも嬉しい月見橋

○昔ばなしは浜田のあたり

船もついたよたから船

○村を一目の高山さんで

雪の御嶽遠おがみ

○遠い昔は城だときけば

禿げた中山なつかしい

○盆はうれしや揃いの浴衣

八幡様では輪に踊る

○昔酒蔵並んでおった

名残りとともに井戸車

○盆はうれしやあの世の人も

村の踊りを見にござる

○和敬観音七番さまは

知多の自慢の大そてつ

○とんとんとと 薬打つ槌は

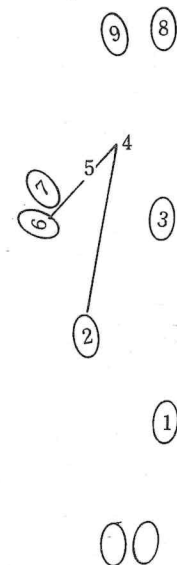
国を興せの福の槌

○今宵出た月や金比羅さまの

馬の首みて胆つぶす

シヨンガイナ踊りの手と足の動き (左まわり)

	手	足
①	前	右前
②	後	左前
③	前	右前
④		左上
⑤	たたく	↓
⑥		左横
⑦	たたく	右横(左むきえる)
⑧		右前
⑨	たたく	左前(前むきえる)



岩滑盆踊り (シヨンガイナ)



○うれしはずかしお盆のよさは 好いたお方と手を合わす

○昔なつかし幾多の友と 踊り踊ってあけくらす

○盆はすべてを彼方に流し 老も若きも踊りぬく

○踊る手ぶりに見とれる月は 高山さんの端に入る

○岩滑おどりはいついまでも 見ても聞いても心地よい

○村は一面黄金の波よ ゆれてはるかな石のいる

○半田亀崎女の夜なべ わけて岩滑は縄どころ

○盆はたのしや踊りにまじり 踊り踊って夜をあかす

昭和三十年ころから、各地の民謡「そうらん節」「ひ

えつき節」「真室川音頭」「炭抗節」「名古屋音頭」な

どをとり入れて踊るようになり、踊る人数もふえて来た

ので、八幡社境内で行なわれるようになった。

昭和四十年ころからシヨンガイナは殆ど踊られてい

ないが、岩滑コミュニティ活動がさかんになるにつれ

て、岩滑を見直そうというところから、半田市内で唯一

の盆踊り唄であるシヨンガイナを再び踊るようにする

ための準備会がもたれ、民謡クラブで練習もはじまった。

半田農民歌

昭和四年の大恐慌の後で、半田の農民の
生産意欲を高め、経済を豊かにするため

に、野菜や穀物などの生産物を即売する「三八朝市」が

開かれるようになり、現在の農業協同組合の前身である

「半田信用組合」が世活をした。また、農民の意欲を高

め、共同体としての連帯を深めるために盆踊り唄が作ら

れ各地で踊られた。

中絶半六作詩の「夜明」と「れんげむらさき」である。

ほかに「土」も歌われていた。

夜明

中絶半六 作詩

岩槻三三 作曲

一、半田夜明けて朝日は昇る 今日も晴れたよ気も澄み渡る

麦が穂にのりや菜の花ざかり 霞む野山は 我が天地

スットン トントン

二、さつと一蹴打込む力 腕は筋金躍るよ胸は

国はみずほよわしらは若い 拓け野山は 我が天地

三、並ぶすげ笠手先も軽く 植えよ唄およ田植の歌を

赤いたすきは乙女の心 守れ野山は 我が天地

四、半田夕焼入日は映えて 広い野山に黄金の波が

満ちてあふれて希望に躍る 躍る彼方の 聞の声